

## 近世中期真宗中本山の運営組織 ——越後浄興寺台所日記の分析から——

松 田 愼 也\*・木 村 伸\*\*

(平成10年 4 月30日受理)

### 要 旨

近世寺院史において、地方寺院の組織及び運営について目を向けた研究は極めて少ない。しかし、近世において寺院は地域文化の重要な担い手であり、その社会的意味は意味は今日よりはるかに大きかったに違いない。地域史の再発見、地域文化の再評価のためには、地方寺院の研究が欠かせないものと考えられる。本研究は、新潟県上越市に所在する真宗寺院、浄興寺に残された寺務日誌の分析から、18世紀半ばにおける同寺の運営組織を明らかにしようとするものである。筆者は、この研究を通じて、同寺の運営が山内寺院住職らによって構成される役僧たちの監督下、台所とよばれる事務局を通じて処理され、その周辺に非役の僧、門前、中間等のその活動を補助する人々が組織されていたことを明らかにした。

### KEY WORDS

Japanese Buddhism	日本仏教	Yedo period	江戸時代
Jodoshinshu	浄土真宗	Buddhist temple	寺院
management system	運営組織		

### 1. は じ め に

近世中期の真宗中本山寺院の研究は、本願寺の東西分裂との関係や末寺数の変化、本山や御坊との関係が中心となっており、寺院としての運営組織の全体像の解明はほとんどなされていない。

また、中本山に付属する山内寺院(寺中)が本寺の経営にどのようにかかわっていたかを扱った研究としても、管見の限り、森岡清美氏が『真宗教団と「家」制度』の中で、山形県酒田の浄福寺、長野県須坂の勝善寺、滋賀県近江薩摩の善照寺に残る寺中服務規程の事例を取り扱ったものがあるのみである<sup>(1)</sup>。さらに、本寺の経営に門前百姓や中間・下男といった雇われた人々がどのようにかかわっていたのかは、全く不明であったと言ってよい。

そこで本論では、東本願寺下の有力中本山寺院であった新潟県上越市の浄興寺を取り上げ、その寺務日誌である『御台所日記』<sup>(2)</sup>(以下、「日記」と略す)から、これまでに解説の了った元文3(1738)、寛保2(1742)年、同3(1743)年、延享2(1745)年、同4(1747)年との

---

\* 社会系教育講座

\*\* 新潟県上越市立直江津東中学校

5年分、10年間の記録によりつつ、その組織の全体像の把握、特にいかなる人的組織を有していたかについて明らかにすることを目的とする。

## 2. 住 職

「日記」の内容に入るまえに、この時期の浄興寺住職の状況について簡単に記しておく。元文3年は、開創以来の家系に属する最後の住職が11月の報恩講の前夜に東本願寺内でなぞの自殺を遂げた年である。「日記」は4月までしかないが、この間、住職は在京で不在である。山内には、前住職が隠居としていた。寛保元年には新住職が入寺するが、翌2年夏には他寺へ転住し、再び無住となる。延享2年夏に次ぎの住職が入寺し、延享4年までは住持するが、これもまもなく退寺してしまい、以後長く無住状態が続くこととなる。このように、この10年間は浄興寺にとって激動の期間であり、実際の運営が住職主導で行われ得たはずはなく、寺務機関である台所を中心に行われたことは想像に難くない。

## 3. 役 僧

事務機関としての台所を総括していたのは役僧たちである。

浄興寺山内に役僧職が置かれていたことは、集合的な意味で用いられた「役僧」との語が「日記」の所々に現れてくることから明らかである。延享2年を例にとると、元日条に「御堂晨朝過、役僧不残御礼ニ罷出」とあるのをはじめ、1月20日条には「三位様御月忌始」として御台所での齋が役僧に下し置かれたとの記事があり、また同23日条には檀家の初七日法事に「役僧不残」が出向いたこと、2月11日条にも檀家の法事に「惣役僧不残」が参加したことが記されている。このような集合的な意味での「役僧」の用例は、毎月朔日や節句において行われる定例の「御礼」の際、上記のような有力檀家等の葬儀、法要の際、あるいは山内の重要事項決定のための会議の際<sup>(3)</sup>等にも見られる。

時には「有合役僧」との記述もある。「有合」は恐らく「ありあわせ」と読み、「都合がつかず出席した」との意味であろう。用例は定例の「御礼」、葬儀、あるいは山内相談の際等<sup>(4)</sup>であり、「役僧不残」とあるよりも重要度が低い場合、あるいは緊急を要するが多いように思われる。

それでは、役僧にはどのような人々が任命されていたのであろうか。これを直接的に知ることのできる記事は1例しかない。

一、三位様御月忌始御齋、於御台所役僧被下置、正光寺・浄泉寺・正念寺・玄興寺・西光寺・善了・西光寺隠居罷出、其外御断有之候（延享2年1月20日）

ここから、まず、正光寺・浄泉寺・正念寺・玄興寺・西光寺・善了・西光寺隠居の7人がこの時点で役僧であったことがわかる。寺院名はいずれも山内寺院の名（浄興寺には山内寺院が9ヶ寺あり、この5ヶ寺の他、浄正寺・専称寺・善福寺・勝見寺がある）であり、ここではその住職を指す。残る4ヶ寺の中、浄正寺・専称寺は、後述するように、当時の山内序列において正光寺・浄泉寺に次ぐ第3・4位にあり、当然、役僧であったはずである。そして、この日の欠席の理由は、前後の文脈から、浄正寺は今町へ年頭挨拶に出掛けていたため、専称寺は病気と考えられる。また、善福寺は西光寺に次ぐ第8位であり、これも役僧であったことは間違いな

い。善福寺は、この前日より京都へ旅立っており、それゆえの欠席である。善了は、寛保3年12月15日条に「勝見寺内善了」とあり、勝見寺の関係者である。だが、住職ではない。勝見寺は、本論文で扱った期間、何らかの理由から住職を欠いた状態が続いていたようである<sup>(5)</sup>。西光寺隠居は、寛保2年までは同寺住職として、役僧の筆頭にいた人物である。

以上から、延享2年1月の時点では、少なくとも10人の役僧がいたことになる。この他に役僧のいた可能性はあるだろうか。そこで、このことを彼らの仕事内容を見ることから考えてみたい。

彼らの任務で最も重要なものは、台所当番である。これは浄興寺一山の事務局として、事務を総括するとともに、その記録を「日記」に留める役目である。延享2年の場合、西光寺隠居を除く9人が、2人ずつ15日交替で、順番に台所当番を勤めている<sup>(6)</sup>。これ以外で当番を勤めた者はいない。また、定例の「御礼」、葬儀、廻旦（檀家まわり）等に名代として出るのも彼らの内からである。その際、役僧、あるいは添役僧、または加役と称する者が1～数人同道することもあるが、これも彼らの内から出ている。また、このような場合、伴僧が付けられることもあるが、伴僧として彼らの名があがることはない。また、高田御坊や荒井御坊、町会所、他寺院等へ使僧として立つのも多くは彼らである。このように、台所当番を替わり番で勤める者たちが、同時に名代や加役（又は役僧、添役僧）、使僧を勤め、また伴僧役にまわることがないという傾向は、他の年においても同様に見られる。

ただ少々難しいのは、寛保2年における善了の場合である。彼は、1月25日には有力檀家の法事に役僧として列座、翌26日にも別の葬儀に加役の一人として出ているのであるが、その一方で2月5日の葬儀では伴僧役もしているのである。彼はまた、翌3年においても、添役僧を4度勤める一方で、伴僧も2度勤めている<sup>(7)</sup>。この間、善了は、台所当番には勿論なっていないし、名代を勤めたこともない。これは、どのように理解したらよいのであろうか。

ここで注目されるのがつぎの記事である。

一、白牛・准応江本座御免之申渡シ、御留守居役善福寺、御台所に而被申渡候（寛保2年5月14日）

白牛は玄興寺住職の弟でありおそらく延享元年に、また准応は西光寺の関係者で寛保3年に、それぞれの寺を継いだ人物である。本座御免以前の彼らの地位は善了とほぼ同格であったと思われる。准応については寛保2年2月1日に名代伴僧も勤めた記録がある。しかし、本座御免の後、彼らが伴僧をした記録はなく、逆に、准応はこの年の後半からしばしば台所の相談に参画するようになり、翌3年になると2人とも台所当番を勤めるようになっていく。このことからすると、本座御免とは役僧入りを意味するものに違いない。また、本座という言い方から推測するに、それと対になった役僧見習いのような地位（たとえば「脇座」）があり、寛保2～3年の善了はそれではなかったかと考えられる<sup>(8)</sup>。

このように考えてくると、役僧とは、基本的に、台所当番を勤める者たちのことであり、その構成員は山内寺院住職及び本座御免となった若干の僧であり、その人数は10人内外であったと思われるのである。

役僧の間に序列があったことはすでに述べた。これは、主として「日記」の記述から導きだされる。すなわち、役僧たちの名が列記されている箇所（全役僧が列記されている例はまずない。その多くは2人か3人である）を年ごとに収集し、それらを対照することから、その年における全員の序列が浮かび上がらせることができるのである。序列と矛盾するような配列はご

く少数であるし、また、その原因も推定できる場合が多い。そこで、以下にその序列を示してみよう。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
元文3年	西光寺	善福寺	玄興寺	浄正寺	正光寺	(浄泉寺, 正念寺, 専称寺の序列は不明)				
寛保2年	西光寺	善福寺	正光寺	玄興寺	浄正寺	専称寺	浄泉寺	正念寺	白牛	准応
同 3年	西光寺	善福寺	正光寺	玄興寺	浄泉寺	浄正寺	専称寺	正念寺	白牛	准応
延享2年	正光寺	浄泉寺	浄正寺	専称寺	正念寺	玄興寺	西光寺	善福寺	善了	西光寺隠居
同 4年	正光寺	浄泉寺	浄正寺	専称寺	正念寺	玄興寺	善福寺	善了	西光寺	

元文3年は4月20日までしか記事がなく、浄泉寺については善福寺より下、正念寺については浄正寺より下としか分ならず、専称寺の序列は全く不明である。だが、その後の変化については、かなりの程度説明が可能である。

寛保2年において浄泉寺、正念寺が第7・8位にいるのは、元文3年にいずれも住職が死に、代替わりがあったためである。両寺の序列は住職への就任の順によると思われる。正光寺の玄興寺・浄正寺を抜いての地位上昇の理由は、ここだけではわからないが、この年から延享2年までの浄正寺・専称寺・浄泉寺・正念寺の地位変化とその理由を見るとほぼ推測できる。この4ヶ寺は寛保3年前半に相次いで飛檐<sup>(9)</sup>を御免になったが、その順は浄泉寺、浄正寺、専称寺、正念寺であり、これに従って序列も変わったのである。寛保2年における正光寺の地位上昇も同様に、他の2ヶ寺に先んじて飛檐御免となったためであると考えられる。さて、4ヶ寺は延享2年までに玄興寺を追い抜いたが、それは玄興寺が白牛へと代替わりをしたからであろう。

寛保3年から延享4年にかけての西光寺、善福寺の地位の変化の理由も明らかである。どちらも寛保3年から延享2年までの間に代替わりがあり、下位の序列となった。善了は両寺について本座御免になったものと理解される。ところが西光寺では、延享2年に隠居と住職が相次いで死んでしまい、同4年に、改めて新住職が任命されている。その結果として、同年の序列が最下位となっているのである。

以上の序列の推移からして、山内9ヶ寺は本来的に同等であり、役僧としての序列は住職就任（あるいは本座御免）の順序と飛檐御免の順序に従っていたものと考えてよい。序列による役僧の任務の相違はあまり見られないから、役僧間の権限の差もあまりなかったと考えられる。もっとも、浄興寺が無住であった寛保3年、西光寺の隠居にともなって序列第1・2位となった善福寺と正光寺が、代印を押したり（4月22日条、6月25日条）、地中惣代あるいは上座役として願書に署名捺印したという記事（9月23日条、12月11日条）がないではない<sup>(10)</sup>。

なお、役僧の仕事としては御堂番もあったが、台所日記では断片的なことしかわからないので、ここでは省くことにする<sup>(11)</sup>。

#### 4. 役僧以外の構成員

つぎに、役僧以外で、本寺の経営にかかわっていた人を種類別にあげると以下ようになる。

##### a. 役僧以外の僧

- b. 御台所納所
- c. 門前, 中間
- d. 下男
- e. 末寺惣代
- f. 門徒惣代
- g. その他

以下では、これらの各項について、それぞれ「日記」から見ていくことにする。

#### a. 役僧以外の僧

役僧以外の僧として「日記」に記されるのは、主に非役と伴僧と住職等の御供としてである。まず非役から見ていく。非役とは、その言葉の通り役僧には含まれない僧を指し、その意味では伴僧なども非役に含まれるが、「日記」の中ではもっぱら集合的に用いられている。かれらは、山内寺院の住職の子弟や弟子と考えられ、通常は山内寺院の経営に関わっていたものであろう。

非役はどのような場合に本寺に出仕したのであろうか。寛保2年3月3日条では、「当日御礼、役僧並ニ非役共ニ御臺所へ被出候」あり、節句の「御礼」に役僧と共に台所へ出仕したことがわかる。もっとも、必ずしも毎回の「御礼」毎に非役が出仕していたわけではなく、一年に数度見られるに過ぎず、出仕の理由は不明である。

また、非役の者たちは、本寺が人手不足の際、手伝いに駆り出されることもあった。

- 一、御堂御拂除当文堂前不残そうし有之候、御役僧ハ不及申、非役並々ヶ寺付下男壹人宛  
門前式人罷出候（寛保3年6月15日）

このように非役達は、御堂前の掃除などのような大人数で行わなければならない仕事の場合には、その手伝いにも参加していた。あるいは、非役たちが、本寺住職の飲食の相伴に預かっている例もある。

- 一、例年之通、今晚御寺中九ヶ寺並非役衆迄被召寄、於御居間御松離子御祝儀御祝被遊候、  
尤御吸物御酒御盃頂戴被遊候（寛保2年1月2日）

この他にも斎や非時といった飲食を行う行事を共にする例が見うけられる。

次に伴僧の例を見てみよう。伴僧と呼ばれる僧侶は、葬儀の際の補助役である。「日記」によると、伴僧が参加している葬儀は、有力檀家や末寺の葬儀のような役僧が複数出掛けるような場合が多い。

- 一、下寺町浄國寺葬礼四ツ時、御名代役善福寺相勤申候、加役浄泉寺、専称寺、准應、手  
次役白牛、御名代伴僧簡應、礼應罷越申候、御臺所ヨリ大キン並ニきんだい指越申候  
（寛保3年閏4月15日）

これは、末寺の浄國寺における葬儀の記事であり、伴僧として簡應、礼應という二人の僧侶が参加している。この二人は、先にあげた非役の僧であったと考えられ、伴僧以外では「日記」にはほとんどその名の記されていない人物である。

伴僧役の僧は、山内各寺においてそれぞれに準備しておくものであった。

- 一、御地中西光寺に、宜敷者ニ御座候故伴僧相頼申候、抱遣候、御断仕候（寛保2年12月  
7日）

- 一、寺町妙行寺弟雲貞と申僧、御地中浄泉寺伴僧無之ニ付、当分相頼置申度由、浄泉寺に  
御断申上候（寛保3年9月24日）

この2つの史料は、いずれも自分の寺で伴僧の適役者がいないので、他所から頼むことにしたとの報告である。なお、伴僧を勤めた者の中から役僧に昇格した者があったことは、准応や善了の例で見た通りである。

住職等の御供として出掛ける場合には、「御供……正光寺、白牛、是海」(寛保2年1月23日)のように、役僧(ここでは正光寺)と区別せず、列記されることもある。

この他、御堂にも一人非役がいたことがわかる。

一、節句夜、立替ニ付、御台所長持より式ツ、御堂教円方江相渡申候(寛保2年5月4日) 教円は節句の際の加役として勤めていたらしく、彼は同年11月の報恩講の時にもその名が出てくる。

#### b. 台所納所

台所には保坂弥左衛門という人物が納所として勤めていた<sup>(12)</sup>。彼は、住み込みであったらしく、時々、宿下がりをしたという記事がでてくる。

弥左衛門の仕事は広範にわたり、正月に門徒への年礼の挨拶に在方へ出かけること、浄興寺の宝物の虫干しに立ち会うこと、風が強い日や火事の危険があるような日は風廻り当番として境内を巡回すること、台所当番の手伝いをしたり、銭勘定に立ち会うこと、山内寺院へ台所から書状を渡すこと、寄進などに立ち会うこと、輪番へ使者として出向くこと、台所当番が不在の際はその代わりを務めること、台所の米が不足すると在方に出向いて布施集めをすること、住職の御供をすること等を台所日記からあげることができる。また、

一、弥左衛門留守ゆへ御臺所留番、門前之番共相勤申候 (寛保3年1月19日) とあるように、台所留番と門前の番をも兼務していた。このように弥左衛門は、台所当番の代わりや輪番への使いなど、役僧たちと同じような、非常に重要な仕事まで関わっている。恐らく、台所の事務長のような役割を担って、次項に採り上げる中間たちを差配していたものと考えられる。

#### c. 門前、中間

随時に台所の用事を命じられている者には、門前と呼ばれる者と中間の二種類がある。

まず、門前についてであるが、これは本来浄興寺の門前に住む者達を指す言葉である。延享4年の「明細書上帳」<sup>(13)</sup>によると、

一、門前と申候而往古は拾三軒有之候得共、唯今は俗家式軒有之候とあり、かつては13軒有ったが延享4年には2軒にまで減ったと記されている。日記でも、元文3年3月に門前の源右衛門が立ち退きを願い出て、許されている。従って、門前は少なそうなものだが、浅右衛門、喜右衛門、吉兵衛、清兵衛、彦右衛門、与壺右衛門、与三右衛門、与三郎、与惣右衛門等と多数出てくる。2軒の人数としては多すぎるように思われる。あるいは、上記の源右衛門が許可を得た一月後になっても仏供米集めに出掛けていることからすると、門前を立ち退いた者でも、門前としての関係を浄興寺と維持し続けたのかもしれない。

門前の中で、特に多く日記に現れるのが彦右衛門と与三右衛門の2人である。この2人については、

一、御堂御普請大工細工場所、御仲間与三右衛門彦右衛門罷出候而相繕申候 (寛保3年7月11日)

とあるように、中間も勤めていた。ところで、

- 一、倉石文八相果申候、諷經本誓寺殿迄専称寺御名代被成候、供御臺所御仲間兩人召連候  
(寛保3年1月24日)

とあることから、浄興寺の台所には、二人の中間が常に勤めていたことがわかる。あるいは、それはこの2人であるかもしれない。さらに、山内にはこの他にも少なからぬ中間のいたことが「日記」から知られる。例えば、寛保3年5月14日条には「惣仲間、御台所江罷出様ニ申付」とある。門前として名前の上がってくるものの中には、山内寺院で中間をしている者も多かったのではと推測される。

だが、中間はこういった門前の者だけではなく、他所から雇い入れていた場合もあったことが日記からわかる。

- 一、御中間壹人相抱申候、所は春日村之名ニ而御座候、御給金三月分銭貳百文ニ相定申候、  
今日も相勤仕申候 (元文3年2月5日)

とあるように、春日村より中間を雇ったのである。もっとも、この男の場合は、6日後に「不逞之由」をもって解雇された。これは、次に見るように浄興寺の中間が重要な役割を担っていたため、信頼の置ける人物でなければ勤まらなかったためと推測される。

中間の仕事がどのようなものであったかを具体的に見てみよう。先にあげた門前の2人の中間について調べると、浄興寺の中間の仕事は主に、他所への飛脚、使者として役所や会所及び御坊へ出向くこと、宗門改めの場所までの宗門印形の持参等が上げられる。宗門印形の取扱を許されていることからすれば、浄興寺の中間としての仕事は、余程信用のおける人間でなければ勤まらないものであったに違いない。さらに、中間はかなり重要な寄合にも参加している場合がある。

- 一、朝五ツ過、御台所ニ而廻旦順道わり付御相談有之、中間へ寄合申候事、廻文相廻シ申候 (寛保2年9月19日)

- 一、西光寺隠居之儀付、中間指合ニ而善福寺、同正念寺、両寺ニ而申渡候  
(寛保2年11月5日)

- 一、明日も十日番玄興寺当日勤ニ有之間申遣候得共、病氣ニ而罷有之間難勤由返事ニ候、  
街街を以善福寺殿迄御相談被成候、右病氣ニ御座候間、何とそ送り番ニ被成被下候様ニ  
との願ニ有之候ニ付、仲間中相談故、十日番正光寺江送ル (寛保2年12月14日)

まず最初の一つ書きは、浄興寺の重要な行事である廻旦についての相談である。次の一つ書きは、寺中の一つである西光寺が隠居すること件についての申し渡しであり、中間がその場の設営を行ったことがわかる。3つ目の一つ書きは、台所当番についてのものであり、次の当番であった玄興寺が病気のため勤められない旨を申し出たため、中間たちが、老僧格の善福寺と連絡を取りながら、相談によって次の台所当番を決めたものである。

このように中間は、単に浄興寺の下働きをしていたのではなく、かなり重要な事務を処理していたのではないかと考えられる。中間の総数は以上のことからすると、少なくとも4～5人はいたのではなかろうか。

#### d. 下 男

これらの人々が実際どの程度いたのかは現状ではわからない。ただし、先にaであげた御堂掃除の記事には、「寺付け下男壹人宛」とあるように、各寺中に下男が最低一人はいたことは確

かであろう。下男がいれば、当然、下女もいたことだろうが、日記に下女との語は見いだされなかった。また、寺中だけではなく、浄興寺そのものにも下男・下女がいたはずであるが、それ以上のことは「日記」から推測することは出来ない。

#### e. 末寺惣代

浄興寺には、江戸時代80余ヶ時の末寺<sup>(14)</sup>が有った。寛保3年の「日記」の記事から、浄国寺<sup>(15)</sup>と覚真寺<sup>(16)</sup>が末寺総代を務めていたことがわかるが、この2ヶ寺は浄興寺住職早期任命の願書に連署している。

一、早朝ニ善福寺西光寺並ニ隠居相談之上ニ而、夜前之御輪番所ニ参申候御住持様御願書  
清書仕候、尤末寺惣代として浄国寺、覚真寺、地中惣代善福寺、正光寺相添申候、清書  
人筆者西光寺（寛保3年9月23日）

特に覚真寺は、その前にもこの件で相談に台所へ訪ねてきていることが次の記事からわかる。

一、春日新田覚真寺、後住持様御事ニ参申候（寛保3年8月23日）

さらに覚真寺は、浄興寺の有力末寺を語らって、輪番所を動かし、輪番名義による末寺集会文を出させることに成功した。

一、御住持様御願之義ニ付春日新田村覚真寺ニ之相談ニ付、御末寺荒井極生寺、新町村浄  
林寺、木田村福成寺、下寺町浄国寺へ廻文差出候へハ、則右之寺方御臺所へ集會被致候、  
猶又相談之趣覚真寺御坊へ被参候得ハ、御輪番所ニ而も委細御聞届ケ之上、頸城御末寺  
中へ御坊輪番成林寺判と御廻文御認、来ル十三日ニ浄興寺台所迄各集会可有之旨、御廻  
文ニ御書成、覚真寺へ相渡シ被遣候ゆへ、当番所ニ右之御廻文御願置候  
（寛保3年9月5日）

このように末寺惣代は、日常的な経営にはほとんどかわり合わないが、浄興寺の住職を決めるための集会を開く際やそのための京都への上京<sup>(17)</sup>など、重要な節目には浄興寺の運営に関わって来ている。それ以外にも、末寺は年頭挨拶や盆参をはじめ、火事見舞いや留守見舞いなどで浄興寺を訪れている事が「日記」に記されている。

#### f. 門徒惣代

門徒惣代もまた末寺総代と同様に、浄興寺の重要事の際は相談に加わっている。

一、京都ニ御状到来ニ付、町在御門徒中江廻文出候ニ付、御門徒中集会柳林彦六、針村清  
左衛門、門田村与次兵衛、籠町長右衛門、向橋新兵衛、金屋九兵衛、関町弥惣右衛門、  
岩木喜助何連も御相談之上ニ而、御門徒惣代上京人岩木村喜助ニ相極申候  
（延享2年2月24日）

このように、延享2年に新たに住職を迎えるときに、有力門徒達の間で相談が行われ、門徒惣代が住職を迎えるために上京したことがわかる。この他にも、浄興寺の有力門徒であった森繁右衛門<sup>(18)</sup>は寛保3年の浄興寺無住期には、浄興寺の宝物そのものを預かっていることがわかる<sup>(19)</sup>。このように、門徒の浄興寺の運営に深く関わっていた。

#### g. そ の 他

以上あげた以外に、住職の他出の際に寺侍や挟箱持ちが御供として付いていく場合もある。

一、御院主様町御礼ニ朝五ツ時ヨリ御出、御行士侍三人、六尺六人、挟箱兩人、御傘持壱



人、かつはかこニ弐人、御乗物脇兩人上下ニ而（延享4年1月5日）

一、今日御迎ニ春日新田迄善福寺、かち侍三人、六尺四人、御地中下男新田迄御迎人足ニ参候、御門徒衆被参候（延享4年6月23日）

このように、10～15人くらいの人数が住職について行動している。しかし、「日記」からはこういった人員が普段何をしているかは見えてこない。また、侍などの記事が出てくるのは、延享2年に新しく住職が出口光善寺から来てからであり、それ以前には見られない。このことからこれらの人々は、光善寺から来たのか、新しく住職が来てから雇われたのかもしれない。

## 5. ま と め

以上の検討から、近世中期の浄興寺の運営組織は以下のようなものであったと考えられる。

頂点に立つのは、当然、住職であるが、この時期の住職の頻繁な交替やその間の無住状態を考えると、その存在はどちらかというと象徴的なもので、当面住職がいなくても寺務に支障のでないだけの態勢が整っていたことは確かである。

寺務の中心になっていたのは、主として山内寺院の住職からなる役僧たちとその下で実務を担当する台所の人々であった。役僧の数はおよそ10人で、浄興寺の法務を分担し、また交替で1～2名が台所当番を勤め、その仕事を総括していた。役僧のなかには序列があったが、年功と僧階の有無による緩やかなもので、権限の差はあまりなく、意志決定は合議でなされていたものと思われる。また、役僧は御堂番も勤めたいが、これについてはよくわからない。

台所には、当番の役僧の他、納所の保坂弥左衛門と少なくとも二人の中間がいて、実務一般を執り行い、かなりの権限も与えられていたようである。台所外にも、中間や中間同等の仕事をする門前と呼ばれるものが一定数おり、随時、飛脚や供の役目を勤めた。彼らが、普段、どのように暮らしていたかは不明である。

山内には、住職たちの子弟や弟子である非役の僧がいた。彼らは、台所からの指示によって、法務に出掛ける役僧の伴僧や供をつとめたり、使者に出たりしていた。各寺に最低1人は伴僧役を勤められる非役を置く必要があったらしく、それから考えると、非役の数は山内寺院の数9より常に多かったものと推測される。

山内各寺にはそれぞれに下男がいた。彼らは、山内の仕事で手がたりないときには、非役とともに駆り出された。

住職の行列に顧従する侍や草履取り、長柄等の人々が、通常、浄興寺とどのように関わっていたかについては不明である。

末寺、門徒は、浄興寺の重要事項に関して、それぞれ末寺集会、門徒集会を開き、それぞれの惣代を中心に役僧との協議を行った。

## 註

- (1) 森岡清美『真宗教団と「家」制度』創文社、昭和37年、pp.293～326。
- (2) 『新潟県上越市 浄興寺史料目録 その一』上越教育大学、平成3年。史料番号102～106。

- (3) 例えば、延享2年5月3日には、新住職お迎えのために京都へ遣わす門徒惣代の決定会議が行われているが、この会議に有力門徒と並んで「役僧不残」が出席している。なお、「役僧不残」とあっても、その後欠席者名が書かれていたり(延享4年1月2日条)、前後の文脈から不在が明らかな者のいる場合(延享2年1月下旬から4月まで役僧の善福寺住職は上京不在であるにもかかわらず、本文に記したように「役僧不残」との記述が見られる)があるから、本当に役僧全員とは限らないことは注意すべきである。
- (4) 例えば、延享4年3月1日条(月例御札)、同19日条(山内浄泉寺妹葬儀)、延享2年10月6日条(門末宛廻文作成)に「有合役僧」との用例が見られる。
- (5) このように考える理由は、もし住職がいたならば、当然、役僧として以下に述べる台所当番を勤めていなければならないが、その記録がないこと。また、寛保3年11月18日条における報恩講前の御台所での齋に、勝見寺からのみ坊守が出席し、しかも住職が出られない理由が書かれていないこと(もっとも、その前年の10月21日の齋には出席者に「勝見寺」の名がある。だが、筆者としては、これも坊守が出たものと考えたい。善了とも考えられないことはないが、以下で論じるように、善了はこの時点ではまだ役僧ではなかったと考えられ、可能性は低いと思う)等があげられる。あるいは、元文3年以前に住職が死亡したものの、息子が年少であって後継できないような事情があったのではないか。
- (6) 台所当番の勤め方は、年によって変化があり、元文3年には2人づつ月番で、寛保2～3年は1人づつ10日番で、延享2・4年は2人づつ15日番となっている。また、順番の定め方、人の組み合わせにはある程度の規則性は見られるものの、異同も多く、運用の実態は見定め難い。
- (7) 寛保3年4月21日条「伴僧役」、同閏4月9日条「伴僧」、同25日条「役僧」、同28日条「添役僧」、同5月2日条「添役」、同9月18日条「添役人」。
- (8) この考えを支持する史料として寛保2年4月10日条をあげることができる。  
 一、両替町中野宗硯母死去ニ付、御名代善福寺、葬礼今九ツ半時御本堂ニ而有之、役僧不残罷出候、善了も罷出候  
 この記事は、善了が役僧外でありながら、役僧並に出座したことを意味するのであろう。同様の記事は、延享4年1月2日条にも見られる。  
 一、例年之通り、今暮時より役僧不残、丹意・順栄迄、御台所ニ而松む屋御祝儀として御盃被下(以下略)  
 ここでも丹意、順栄は役僧に準じて扱われたのである。
- (9) 寺格のひとつであり、浄興寺山内9ヶ寺はいずれも飛檐であった。ただし、僧侶の階位の意味もあったようで、代々飛檐の寺だからといって、住職就任と同時に飛檐が許可されるものではなかったようである。浄興寺の場合、寺格は院家であったが、延享4年に高田藩へ提出した「明細書上帳」(扣)(『新潟県上越市 浄興寺史料目録 その一』上越教育大学、平成3年。史料番号 No.4)によると、「住持之位階、代々、即座院家ニ而御座候事」とある。「即座」ということは、そうでない場合もありうるということであろう。
- (10) 森岡氏前掲書によると、酒田浄福寺では寺格によって老僧格になれる寺が決まって

いたというが、浄興寺山内は註(10)に述べたように寺格は等しく、また実際差別はなかったようである。別添・浄興寺史料1「覚」によれば、延宝3年には役僧中に老僧格が3人いたことが知られ、彼らが中心となって寺務が遂行されていた様子が伺えるが、文末の役僧たちの署名順をみると、本論文の取り扱った期間とは大いに異なっている。

- (11) 御堂番に関する台所日記記事としては、玄興寺・専念寺の「御堂方」をしばらく免除したもの（寛保2年3月19日条）の他は、寛保3年1月22日条、同5月24日条、延享4年8月5日、同21日条にその時の当番の名が散見されるだけである。延享4年の2例は、台所当番と兼務であったようにも思える。また、別添・浄興寺史料2「定」は、宝暦8年における御堂番勤めに関する山内申し合わせである。ここでも役僧たちの署名順がこれまでのものとは全く異なっていることは注目されてよい。なお、別添・浄興寺史料3「條々」は、製作年月日不明ながら、台所当番の勤めをはじめ役僧の心得を書き付けたものとして興味深い。
- (12) 弥左衛門が納所であることは、寛保3年12月7日条からわかる。
- (13) 『新潟県上越市 浄興寺史料目録 その一』上越教育大学、平成3年。史料番号No. 4
- (14) 『訂正越後頸城郡誌稿』下巻（豊島書房、一九六九）では「境外総末寺八二ヶ寺」とする。
- (15) 浄國寺は高田下寺町にある寺であり、江戸時代を通じて浄興寺の末寺であった。
- (16) 覚真寺は春日新田村にある寺であり、江戸時代を通じて浄興寺の末寺であった。
- (17) 例えば延享2年の2月19日の記事には、末寺惣代の新町村浄琳寺が京都へ上京していることが記されている。  
一、京都御本山ヨリ、御住持様之御義ニ付、集會所ヨリ御門末御地中御召ニ付（右ワキ書）〔集會所ヨリ御狀參候〕、御末寺中集会、覚真寺・浄泉寺・浄琳寺・速念寺・敬泉寺・光源寺・称名寺・妙行寺・極生寺名代正敬寺、浄国寺・大巖寺・勝名寺・明道寺・泉光寺・正福寺右六ヶ寺使僧瑞満寺、明福寺・慈円寺・敬覚寺右四ヶ寺不參、御門徒中三上宇右衛門・金子六郎右衛門・小川茂右衛門・長谷川権重郎・金屋小右衛門、御末寺御相談ニ而、新町浄琳寺御末寺惣代、京都迄登候雑用金三両と相極、御末寺中江、右之金子配当有之割方別帳ニ相記置候
- (18) 高田の町年寄であり、明治16年の明細帳によると浄興寺の門徒総代を務めていた。
- (19) 寛保3年11月28日の記事等

## 【別添・浄興寺史料1】

### 覚

- 一、毎月御講之上、御書、御讃談ハ、月替リニ、端照坊、玄興寺、西光寺可相勤、但煩か又ハ留守成事、有之者其次相勤可申事
- 一、御堂御番右三人之衆御免ニ而、相残ル九人ニ而、前々之通相勤可申事
- 一、如何様成、旦那たりといふ共死後ニ、御屋敷之内ニ而、取置申時分ハ、御案内申上指図被請取置可申候、並在々所々ニ而取置申候共、御案内可申上候、又年季吊寺中ニ而致候共、是

以御寺へ御案内可申上候

- 一、御寺御留守之内ニ旦那取置ニハ、右三人之老僧之内、一人御名代仕、旦那を加へ取置可申候、並施主、手次、焼香金においては各別焼香代ハ、御寺江差上ケ可申事
- 一、右之町方勸進取立ニハ、及無、万隆、正光寺、浄泉寺、善福寺、祐悦、右六人ニ而取立可申事
- 一、大工日帳ハ、浄正寺、勝念寺、専正寺、付可申事、猶又右六人、勸進取立か、又ハ御使杯参、留守成時者御番浄正寺、勝念寺、正見寺、専正寺、是四人ニ而、かわりニ相勤可申事
- 一、御堂御普請方、端照坊、西光寺日替りニ罷出、指図可仕事
- 一、正月、盆、法恩講ニ寺中迄参候旦那不残、御寺江御目見江召連レ可申候、自然、旦那罷出間敷と申候ハ、御案内申上候、随遅余仁ヨリ知レ申上候、越度ニ可被仰付候、右被仰渡候趣奉得、其意ヲ少モ違背仕間敷候、若違背之者有之候ハ、或ハ過錢、或ハ閉門、或ハ追放、其所ニ寄被仰付候、其時一言申上間敷候、為後仍如件

延宝三年 卯ノ二月日

端照坊 西光寺 玄興寺 正見寺 正念寺 浄正寺 専正寺 及無 万隆 正光寺 善福寺  
祐悦 浄泉寺

### 【別添・浄興寺史料2】

#### 定

- 一、当番之同者は、同役、案内違時刻申間敷候、若不参仕候ハハ、翌日ヨリ五日之過番、為勤可申事
- 一、御遠夜、御命日、燭香之埋火は勿論、朝夕御三所土香炉之線香無失然献シ候様、相替可申候、若於不献ニ、十日宛過番、相勤可申事
- 一、御堂御番不仕当夜他山ニ仕候ハハ、一月茂過番相勤可申事、  
其外御前之御給仕不調法之義有之節者、依罪之輕重ニ、過番之義示説之上、急度從首座、可申渡者也

宝曆八年 寅十二月

西光寺 勝見寺 正光寺 善福寺 玄興寺 正念寺 専称寺 浄正寺 浄泉寺

### 【別添・浄興寺史料3】

#### 條々

- 一、諸事月番料管仕可事  
寄拂、借濟、普請、修理、音信、贈答、火事、盜賊、生産、死去、屋敷廻猥致義、昼夜狼藉之義、惣而一切之義也
- 一、境内不残月番下知可相守事
- 一、月番依怙偏頗於有之ハ其迷惑人候也月番江以訴状可申出候月番類間ヲ引候而不取次時者又其以断書相添直可申出事

- 一、惣而日記ニ可相記為小事共日記ニ留之可為不調法事
- 一、適他所ヨリ之参候者平生参候者たりといふ共一物願事或者様子有之ハ宿坊ヨリ月番へ相達月番以差留可致同道事
- 一、遠方へ使者並子細有之使は一往窺可申事
- 一、町在共ニ講衆ハ不申及講外たりとも切々参詣之門徒相果申候ハ、末寺寺中共ニ急度御断可申事
- 一、在々□候節本坊ニ合在院時ヨリ却而不禮多リ万化配布多ル多候是等ハ役人分可致思慮事膳部ニ先へ箸ヲ従け又は他意ニ新致造候雪隠へ先へ参り尾箆ニ為躰惣而両々共然も人躰ニ而ハ□□や有間布事ニ候
- 一、役人之坊主寄行之時供いたし候節はき物可致料管又町中ニ而噺等仕候義有間布事
- 一、本坊へハ並傍堂へハ諸事相慎候分ニ而他所へ一人罷出候砌止停之働不遠慮之口上等有之由聞及候本坊並傍堂共ニ曾而内談之義他人ハ不可許□□□役ニ而悪口可申然ハ自他ニ身持之差別有之ハ此奥尾箆之至極□可相慎事
- 一、酒たはこ等ハ平生之呑物ニ而候得共膳中ニたはこ盆ヲ乞又は長キきせるヲくわへ自分へ挨拶申又年若之者大盛ヲ出シ引受申義勘席可申事
- 一、行興供前後ニ立不侍ニ候二三間□ヨリニ反時も可致供事
- 一、御堂内ニ而頭巾をかぶり申候儀年々不可然旨申といへ共香部屋等ニ而ハ密ニかぶり候由能々可致思慮極寒之節二三十日も遣人之相伴仕候てせ事可仕候
- 一、惣領之新發意ハ各別次男三男等から伴僧引事ニ不仕住持他行ニ我カ替リニ相添惣而惣領同前ニ仕候義□可為無用事
- 一、諸之書物印形世致吟味寺付之印形取可申事
- 一、末寺添状ハ直ニ罷出可申聞事

## Management system of a local Shinshu-temple in early modern times

— from the analysis of the diaris of Jokoji-temple written in middle 18th c.—

MATSUDA, Shinya\* KIMURA, Shin\*\*

There exist very rare studies about local buddhist tempels in early modern times, especialy on their management sysytem. These studies should be promoted, because temples was much more imfluential in a local society than modern times. From these we will able to understand that period more clearly.

The authers tried to make clear the management system of Jokoji-temple from analyz- ing the contents of its diaries written by monks, who were the members of secretary office of that temple. According to our estimate, there were about ten secretary monks. Under them, there were 3~5 clerks, who treated dairy works. Besides, 20~30 mens including monks worked under their direction.

---

\* Division of Social Studies

\* \* Naoetsu-higashi Secondary School, Joetsu-city